

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830093

研究課題名(和文)クセノフォンのソクラテスの著作における正義論の研究

研究課題名(英文)A Study of Socratic Justice in Xenophon

研究代表者

近藤 和貴 (Kondo, Kazutaka)

早稲田大学・政治経済学術院・助教

研究者番号：70434214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ソクラテスの正義論が彼の生に内在する哲学的生と政治的生との対立を調和する原理であることをクセノフォンの著作の読解によって証明することである。

24年度は『弁明』を読解し、ソクラテスの生に調和困難な二つの様式があることを指摘した。ここでは、彼を都市のモラルの体現者とみる見解を批判し、本編のソクラテスには、都市の価値をラディカルに批判する要素があることを指摘した。25年度は『オイコノモコス』から、彼の教育活動の背後にある正しい生の観念を考察した。その結果、彼は市民との道徳性の違いを認識しながらも、市民と共生し善を与えることを自らの生の原理としていると解釈した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the research project on Xenophon's Socrates is to prove that his theory of justice is the principle that reconciles two different elements of his life: political and philosophical.

In 2012, analyzing Xenophon's APOLOGY, I found that there are two modes of life in Socrates. Against the common view that Socrates only represents the vulgar morality of the city, I pointed out that on some level he also criticizes the popular morality. In 2013, I interpreted his view on the right way of life by analyzing his educational activity in the OECONOMICUS. From this, I proved that Socrates realizes the difference between his morality and that of the citizens', he believes that it is right to live with them and to promote their goodness in accordance with their morality.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：政治学 政治哲学 政治思想史 西洋哲学 西洋古典学 ギリシア哲学 倫理学 クセノフォン

## 1. 研究開始当初の背景

クセノフォンは政治哲学の創始者であるソクラテスの思想に直接接触し、その経験を元に哲学活動を行うことができた特権的な著述家であるにもかかわらず、これまで歴史家や伝記作家として分類されることが多く、彼のソクラテス的著作の哲学的内容に関する研究は怠られてきた。

とりわけ19世紀ドイツで古典文献学が隆盛を極めて以降は、クセノフォンのソクラテス的著作はその哲学的重要性が否定され、主にソクラテスに関するプラトンの記述が歴史的事実であることを確認するための補足資料とみなされるようになった。その根拠は、クセノフォンのソクラテスは「通俗的なモラリストに過ぎず、プラトンのソクラテスのような一般道徳に対する厳しい批判精神と思想的跳躍を欠いている」と解されたことにある。この通説は極めて強固であり、20世紀におけるギリシア政治哲学再評価の流れの中でも、クセノフォン解釈は19世紀的なままである。

こうした一般的傾向に対して、20世紀後半、レオ・シュトラウスが、「クセノフォンはソクラテスの政治哲学をその深部まで理解した、注意深い研究に値する哲学者である」という見解を表明し、通説の誤りを指摘した。しかしながら、シュトラウスの研究は説得力があり示唆に富むものの、それらの多くがクセノフォンの著作全体へのコメントリーであるがゆえに大まかな全体像を示すのみであり、各論に関するより詳細な研究が課題として残されている。

さらにシュトラウス後の研究状況を見ても、グレイによる『メモラビリア』の総覧的研究 (Vivienne Gray, *The Framing of Socrates*, 1998) とその他数編の論文を除けば、クセノフォンのソクラテス的著作に関する研究は国内外を問わず進んでいるとは言いがたい状況にある。ましてや、正義論に関しては、ブゼッティによる『メモラビリア』と『キュロスの教育』との比較論文 (Eric Buzzetti, "The Rhetoric of Xenophon and the Treatment of Justice in the *Memorabilia*," 2001) があるのみで、クセノフォンのソクラテス的著作を中心にして、かれの正義論、あるいは「正しい生についての見解」を析出しようとする研究は、世界的に見てもこれまでなかったと言ってよい。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、ソクラテスの正義論が彼の生に内在する哲学的生と政治的生との対立を調和する原理であることを、クセノフォンの著作の読解によって証明することである。この目的を達するため、以下の二点を論じる。

ソクラテスの生に内在する対立を明示的にする。その対立とは、一方で既存の都市規

範をラディカルに批判することを通じて自己陶冶をはかる個人主義的かつ共同体超越的な哲学的生と、他方で市民たちの慣習に従いつつ共に生きることを通じて彼・彼女たちに善き生をもたらそうと努める他者志向的かつ共同体帰属的な政治的生との対立である。

ソクラテスの正義論、あるいは「正しい生についての見解」が、こうした生の両義性を調和する原理であることを明らかにする。具体的には、ソクラテスが、自己の道徳性と一般市民とのそれとの相違を認識しながらも、他者の善き生を志向し、さらに他者と共に都市共同体の中で生きることを正しい生とみなしていたため、都市内在的な批判的共生者である市民哲学者として活動することができた、と論じる。

(2) 上記の目的を達するため、本研究では以下の二つのテキストを中心に扱う。

『陪審員に対するソクラテスの弁明』(以下『弁明』): ここでは、第一に、ソクラテスの生には、都市の通俗的モラルを批判し超越しようとするラディカルな哲学者としての在り方と、都市に内在し市民に利益をもたらそうと行動する共同体帰属的かつ政治的な在り方との対立という緊張関係があることを示し、第二に、ソクラテスの演説がレトリカルなパフォーマンスによって自らを徳のモデルとして提示することで後者を際立たせ、都市共同体の規範の改善を企図していることを立証する。

『オイコノミコス』: ソクラテスは、自己の哲学者としての道徳性と一般市民の道徳性が異なっていることを認識しながらも、両者を調和させるある種の「正しい生」の認識をもっていたことを論じる。具体的には、彼の教育活動の中に、都市と調和し市民を善き生へと導くことが彼の正しい生であったと解釈する。すなわち、彼独特の正義論こそが、ラディカルな批判精神を持ちつつも市民として都市内在的に生きるという「市民哲学者」の統一的な生を支える原理であることを論証する

## 3. 研究の方法

本研究は、現在主流である読解方法の欠点を補うべく、対話篇の演劇形式に注目した手法を用いた。現在ソクラテス的対話篇を読み解く方法として分析哲学的手法が多く用いられている。分析哲学的手法とは、ソクラテス哲学についての重要な発言箇所を対話篇から抽出・命題化し、類似の発言箇所と比較検討することで、その特徴および発展過程を明らかにするものである。この手法はソクラテス哲学の論理的な側面に焦点を絞り、各命題の詳細な分析を可能にした点で大きな成

果をもたらした。

しかしながら、この読解法には、ソクラテス哲学の論理を抽象化しようとするあまり、ソクラテス的な対話が特定の文脈の中で行われている点を過小評価してしまうという欠点がある。「対話篇」という形式が端的に示しているように、ソクラテスの哲学は、その表現を、場面設定、対話相手の性格・関心、ソクラテスとの関係など演劇的な要素に依存している。とくに、クセノフォン研究においては、これまで演劇的要素を考慮せずにソクラテスと一般市民との対話を解釈したために、対話相手とソクラテス自身との問題関心を混同してしまい、ソクラテスの哲学を市井の中に埋没させてしまう傾向があった。この傾向がクセノフオンのソクラテスを通俗的モラリストであると判断する主な原因であり、分析哲学的な手法は文脈を軽視することによって、こうした長い伝統に基づく通説を強化する役割を担っていたと言える。

本研究では、クセノフオンのソクラテスの著作にみられる演劇形式自体を考察対象にすることによって、ソクラテスと対話相手との距離を正確に測り、各々の特徴を文脈に従って分析した。これによって、市民と対話しながらも、市民とは異なる視点と問題関心をもったソクラテスの市民哲学者としての生と哲学を分析することが可能となった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 24年度

本研究全体の目的は、ソクラテスの正義論が彼の生に内在する哲学的生と政治的生との対立を調和する原理であることを、クセノフオンの著作の読解によって証明することである。24年度は、ソクラテスの生に内在する対立を明示的にすることを目的とした。具体的には、彼の生の中に、一方で既存の都市規範をラディカルに批判することを通じて自己陶冶をはかる個人主義的かつ共同体超越的な哲学的生と、他方で市民たちの慣習に従いつつ共に生きることを通じて彼らに善き生をもたらす他者志向的かつ共同体帰属的な政治的生との対立があることを論証することである。この目的を達成するために、クセノフォン『弁明』のテキスト解釈を行った。

研究方法としては、対話篇の演劇的特徴に着目した読解方法を用いた。これによって、場面状況に応じたソクラテスの巧みな対話の流れを明確化し、クセノフオンのソクラテスがもつ道徳的ラディカルさと、そうした批判精神をもちながらも市民たちに彼らの目線からアプローチする彼の対話の巧みさを浮き彫りにした。

研究の結果、以下のような成果を得た。従来の『弁明』研究において、ソクラテスは哲学的深遠性のない通俗的モラリストであり、ただ老齢の厭わしさを免れるためだけに陪

審員を意図的に挑発し死刑になったとされてきた。本研究では、ソクラテスの目的は死ではなく、自己の名声を市民たちの間で高めること、すなわち、市民的観点からみて優れているとみなされる要素をレトリカルに強調していることを発見した。ソクラテスには本来的に都市の価値をラディカルに批判し、それによって自己の生を陶冶していくという哲学的な生の在り方があるものの、『弁明』ではこの側面よりも市民的価値観に親和的な哲学者像の確立に重きが置かれていることが判明した。

本研究の意義は、第一に、これまでプラトンの陰に隠れて真剣な議論さえなされてこなかったクセノフォン『弁明』に焦点をあて、その政治哲学的重要性を明らかにした点にある。第二は、解釈の独自性である。近年、特にアメリカやフランスにおいてクセノフォン研究は進展しつつあるが、『弁明』のソクラテスを「自殺」という観点からでなく、「都市とソクラテスの道徳的対立」という観点から論じたものは少ない。こうした解釈を日本で初めて行い、さらにその正当性を主張した点において本研究は意義を有している。今後は、こうしたクセノフォン『弁明』解釈をもとにして、プラトンの裁判関連著作を読解する方向へと研究を進めていく予定である。

##### (2) 25年度

25年度は、前年度の『弁明』研究で明らかにした、ソクラテスの生における内在的対立、すなわち個人主義的な哲学者としての生と共同体志向的な市民としての生の対立を前提としながら、なぜ彼が二つの生を調和させることができるのかを検証した。こうした「ソクラテス的な正しい生」の起源を知るために、クセノフォン『オイコノモコス』に注目し、詳細な読解を行った。

研究方法は前年度と同様、対話篇の演劇的特徴に注目した読解方法を採用した。とりわけ、『オイコノモコス』は、従来の研究において市井に埋没するソクラテスのイメージに基づいて解釈されてきたため、ソクラテスと対話相手の意図・立場を演劇的に区分けすることによって、ソクラテスの思想を明確にする必要があった。

研究の結果、以下のような成果を得た。従来の『オイコノモコス』研究においては、ソクラテスは農業・家政の営み・妻の教育等を説く通俗的なモラリストに過ぎないと解釈されている。これに対して、本研究は第一に、本作において通俗道徳を説き、善き市民とされているのは対話者イシュコマコスであり、ソクラテスは彼のアイデアに同意していないことを明らかにした。第二に、ソクラテスはイシュコマコスの考えを修正することによって、若者に対して新しい意味での善き市民になるべく教育を施していることを指摘した。このようなテキスト解釈から、ソクラ

テスが自らの生が通俗的な善き市民像からいかに遠ざかるかを認識しており、さらに教育を通じて市民を市民でありながらも自らの生に近づけること(他者に、他者にとっての善をなすこと)を彼が正しさの原理と見做していたと結論づけた。

本研究は、クセノフォンの『オイコノモコス』という、少なくとも日本では学術的にほとんど取り上げられたことのない文献の政治哲学上の意味を確定したことに於いて重要な意義をもつ。さらに、その解釈も、従来の「通俗的なソクラテス」像を覆すだけでなく、通説に反論したレオ・シュトラウスの学説をも、クリトブーロスの分析という点で、さらに進化させるものであり、世界的にも先駆的な研究であると思われる。

今後は、この研究成果を踏まえ、『メモリア』における正義論の分析を行いたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

近藤和貴、ソクラテスはメレトスを論駁したか：プラトン『弁明』篇におけるソクラテスの目的をめぐって、*Studia Classica*、査読有、第4巻、2014、pp. 27-48

飯島昇藏、近藤和貴、佐々木潤(共訳)、レオ・シュトラウス『クセノフォンのソクラテス』、政治哲学、査読無、第16号、2014、pp. 49-62

近藤和貴、クセノフォン『弁明』篇におけるソクラテスのレトリック、西洋古典研究会論集、査読有、第23号、2013、pp. 35-55

近藤和貴、プラトン『メネクセノス』篇におけるソクラテスの葬送演説：帝国主義批判と弁論術の教育的使用について、政治思想研究、査読有、第13号、2013 pp. 245-275

飯島昇藏、小高康熙、近藤和貴、佐々木潤(共訳)、デイヴィッド・グリーン『ギリシア政治理論：トゥキュディデスとプラトンにおける男のイメージ』、政治哲学、査読無、第15号、2013、pp. 94-129

〔学会発表〕(計 5 件)

近藤和貴、クセノポン『オイコノモコス』における教育と哲学、政治経済学会、2014年3月3日、早稲田大学

近藤和貴、クセノフォンにおける慣習と哲学：『弁明』篇におけるソクラテスのレトリックを中心に、早稲田大学ファカルティーワークショップ、2013年7月31日、早稲田大

学

近藤和貴、ソクラテスはなぜ葬送演説を行ったのか：プラトン『メネクセノス』篇における帝国批判と若者教育、関西倫理学会、2012年11月4日、信州大学

近藤和貴、ソクラテスはメレトスを論駁したか：プラトン『弁明』篇におけるソクラテスの目的について、日本政治学会、2012年10月7日、九州大学

近藤和貴、哲学者と名誉：クセノフォン『弁明』篇におけるソクラテスのレトリック、西洋古典研究会、2012年7月28日、早稲田大学

〔図書〕(計 2 件)

近藤和貴、(飯島昇藏、中金聡、太田義器編)、行路社、政治哲学のために、2014、388

飯島昇藏、石崎嘉彦、近藤和貴、中金聡、西永亮、高田宏史(共訳)、早稲田大学出版会、レオ・シュトラウス『政治哲学とはなんであるか? : とその他の諸研究』、2014、366

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 和貴 (KONDO, Kazutaka)

早稲田大学・政治経済学術院・助教

研究者番号：70434214

(2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
なし ( )

研究者番号：